大阪市

西口印刷株式会社

教科書印刷で培った高品質・高速オフセット輪転技術

―中国で一貫生産を行う新工場が稼動―

印刷は文化の担い手。戦後、紙もインキも不足していた時代に教科書印刷を開始した西口印刷株式会社は、最新のオフセット輪転機を導入し、カタログ、パンフレットなど商業印刷でも幅広い実績をあげています。
1992年には、いち早く中国・上海に工場を開設し、IT製品の取扱説明書や通販カタログ、高度な製本・加工印刷物を手がけてきました。2006年10月には新工場に移転していっそう業容を拡大しています。

日本初のA5判オフセット輪転機導入

多くの方が、西口印刷が印刷した教科書のお世話になっているはずです。1949年創業の同社は、新興出版社啓林館、日本文教出版などが出版する教科書の印刷を続けてきました。

「父母が始めた会社ですが、当初は紙やインキの不足に悩み、ジェーン台風で壊滅的な被害を受けるなど苦労したようです。1969年に、日本で初めて教科書用のA5判8色オフセット輪転機を導入し、カラー写真や図版が豊富な理科や美術の教科書の印刷を開始しました」と西口平輔社長は創業期を語ります。

オフセット(平版)印刷は、活字を用いる活版(凸版)印刷に対して、インキ(油)と水の反発を利用して印刷する技法です。当時は、一枚一枚刷る枚葉印刷機が主流でしたが、「父が米国に出かけて研究し、日本のメーカーにロール紙を使って両面を連続印刷し、折りまで自動化した両面8色高速オフセット輪転機を特注しました。この機械に大手印刷会社が注目し、1970年の大阪万博では公式ガイドブック260万部の印刷を一手に引き受けました」と西口社長。

西口 平輔 社長

上海では、印刷・製本のほか、多彩な加工処理を行っています。人に恵まれて仕事を広げてきました。いつか、教科書印刷で中国に貢献できたらという夢を描いています。

オフセット輪転機

それをきっかけに全国に西口印刷の存在が知られ、商業印刷分野にも実績が広がっていきました。

西口社長は、東洋インキ勤務を経て1975年に入社しました。ちょうどオイルショックの頃で、姉婿の二代目社長を支えて銀行回りや営業に力を注ぎ、タウンページのカラー広告やスーパーの折込みちらしなどを開拓、「目玉商品の価格がギリギリまで決まらず、深夜に版が持ち込まれて、徹夜で印刷して朝方に届けるなどは日常茶飯でしたね」と振り返ります。

しかし、80年代後半のバブル景気に入ると人手不足が深刻になり、印刷市場の伸び悩みも懸念されるようになりました。

いち早く、1992年に中国に進出

「印刷市場は、首都圏が圧倒的なシェアを持っています。そこで、一時は東京進出も検討しましたが、投資に見合う成長が期待できないと考え、人手不足解消と将来性を見込んで中国に進出することにしました」と西口社長。

1992年に、現地資本との合弁で上海西口印刷有限公司を設立(80%出資)し、オフセット輪転機を導入しました。「上海初のオフセット輪転機でしたが、資本市場が成熟していない中国では広告宣伝の仕事はほとんどないので、当初は日本向け通販カタログの印刷が主体でした。苦心したのは品質に対する考え方の定着ですね。中国では、印刷物の汚れがあまり気にされないため、本社での研修も徹底して行いました」

メーカーの現地生産と異なり、仕事を開拓しつつ事業を進めてきたため業績があがらず、業をにやした合弁先が出

O U T L I N E

本　　社	大阪市住之江区北加賀屋1-3-9　電話(06)6651-8870
代 表 者	西口　平輔　代表取締役社長
設　　立	1950年
資 本 金	1,200万円
売 上 高	19億円（2005年度）
従 業 員	72人（グループ490人）
事業内容	教科書、学習参考書、電話帳、カタログ、ポスター、カレンダー、パンフレット、広告ちらし、ラベル、その他オフセット印刷全般
工　　場	本社工場、第2工場
海外進出先	中国(上海)

西口印刷が手がけた印刷物

本社

資金の返還を要求、2000年に独資化しました。

2001年に三代目社長に就任した西口社長は、「1998年に製本装置を充実し、IT製品に同梱する取扱説明書の受注を広げて業績は上向きに転じていた時期でしたが、独資化でかえって決断が迅速になり、2003年に黒字化できました。10年余の助走期間に、現地の幹部社員をじっくり育てたことが大きかったですね」と総括します。

上海西口印刷の高速･高品質のオフセット輪転機技術は、上海や蘇洲などに進出している日本の大手フィルムメーカーやカメラメーカーだけでなく、米国の大手ソフト会社やドイツ企業などから高く評価され、さらに、フランスの大手流通企業等からも注文が集まるようになりました。この間、2002年に製本や加工を行う第2工場を新設しています。

新工場移転で高付加価値化

2000年代に入って、日系企業の中国進出はいっそう活発化し、中国経済が大きく成長するに伴って、上海西口印刷の業容も順調に拡大しています。そうしたなか、これまでの工場敷地が道路整備計画にかかったこともあって、新たに用地を取得して新工場に移転することになりました。同社は、長年の実績により、上海市から新工場移転においても、用地の取得から建築申請など全面的に支援を受けることができました。

また、印刷物を通じて、日系企業のビジネス拡大と中国経済への貢献を図ることが期待できることから、国際協力銀行（JBIC）は、上海西口印刷に対して160万ドルの融資を行いました。

上海新工場

「第1、第2工場を集約した新工場は、印刷・製本・加工の工程間のつなぎが改善され、効率的な生産が可能になりました。設備も8色高速自動オフセット輪転機をはじめ、枚葉印刷機、自動殖版機などを強化しています。特に、印刷物、手加工関係の設備を充実させていきたい」と西口社長は説明します。

上海西口では、ダイソーの千代紙を全量生産するなど量産性を追求するとともに、東洋人の手先の器用さを生かして、商品パッケージの加工など高付加価値商品の開拓に力を注いでいます。

いつか、中国の教科書を印刷したい

国内については、今後、どのように展開していくのでしょうか。

「国内の印刷市場は、少子化の影響で教科書の需要が漸減していますし、商業印刷や出版も成熟化が進んで大きな伸びが期待できないと思っています。インターネットの普及で、新聞折込みも楽観できないと思っています。

一方で、原材料の高騰や環境対策などコスト要因は厳しくなっています。幸い、当社は、企画・制作・製版など人手のかかる前工程は行わず、印刷・製本の後工程に特化してきましたので、徹底した自動化で効率向上を図っています。そして、本社は上海西口の司令塔として技術力を一段と高め、グループとして成長を図っていきたいと考えています」と今後の展開を語ります。

その西口社長の夢は、中国の教科書を印刷すること。10月20日の新工場の開所式で「上海西口は人に恵まれて成長することができました。その恩返しをしたい」と挨拶した西口社長は、「いつか、教科書印刷技術を生かして、中国の教育に貢献できたらうれしいですね」と語る姿が印象に残りました。

JBICの融資支援に感謝し、新工場で報いたい

「JBICの融資をいただくきっかけは、取引先の銀行からの紹介でしたが、うちのような中小企業に融資いただけるのか半信半疑でした。申請手続きや資料作成でも懇切丁寧にサポートいただき、融資が決定したときは勲章をいただいたような気分でした。これを誇りにし、JBICや取引銀行、中国の関係者など新工場立上げで助けていただいた皆様に報いるために、いっそうがんばっていきたいと思っています」と、西口社長はJBICの融資について語っています。